

本稿は、ハイデガーの1928年夏学期講義『論理学の形而上学的な始元諸根拠——ライブニッツから出発して』(以下、講義『ライブニッツ』と略記)を中心とし、そこでハイデガーが記した「メタ存在論への転換」および、基礎的存在論とメタ存在論との統一としての形而上学という構想のなかに、デカルトの「物体的事物(res corporea)」もしくはその属性である「延長(extensio)」が、上記文献で記された現存在の「身体性(Leiblichkeit)」と「空間性(Räumlichkeit)」の問題圏へと回収される可能性を探ること、そしてその成果を1920年代前半におけるデカルトの「我在り」の「在り」へ向かうハイデガーの問いの延長として位置付けること、この2点を試みる。

ハイデガーは、1920年代初頭の講義で、デカルトの「我在り」の「在り」の意味を問い、その後、1923・24年冬学期講義『現象学的研究への入門』において、デカルト哲学との本格的な対決を試みた。その際、ハイデガーは、デカルトの方法的懐疑は、すべてを疑うと言うものの、真偽を判断する基準として、「算術・幾何学的な規則」を疑いなく持ち込んでおり、この点で、懐疑は「見せかけ」(GA19, 197)と判断する。そのため、懐疑の果てに見出される「我在り(sum)」の「確実性(certitudo)」もまた、算術や幾何学的な確実性をもった確実性に過ぎないと批判するのである(vgl., GA19, 210f.)。では、存在の確実性をハイデガーはどのように確保するのかといえば、それは1925年の夏学期講義『時間概念の歴史への序説』へ持ち越される。そこで「死すべき者として存在する(sum moribundus)」という言明が、「我在り」の確実性を表明する根本的な言明として掲げられ、デカルトのコギトの確実性が退けられるのである(vgl., GA20, 437f.)。つまり、ハイデガーは、方法的懐疑への批判から、デカルトの「我在り」の確実性を疑い、その確実性を確保する基準を「死」へと転換することで、現存在の確実な「我在り」を表明したのであり、ここにデカルトとの生産的な対決が見られるのである。その後、1927年の『存在と時間』の死の議論では、デカルトの名が出されることはないが、この経緯を見れば、実存論的分析論における現存在の存在に確実性を与える死は、デカルトとの対決から生み出されたことが分かる。<sup>2</sup>

しかし、ここで問題が生じる。ハイデガーは、1928年の「マールブルクでの最終講義より」において、上記のデカルトとの対決を、『存在と時間』の第19節から第21節に組み込んだと述べている(vgl., GA9, 79)。がしかし、この言及は、ハイデガーの単なる思い違いか、意図的な戦略であるかどちらかである。というのも、当該箇所でのデカルト批判といえば、デカルトによる延長とし

ての世界への批判、そしてその実体論の存在論的解釈である。特に、後者は「思考するもの(res cogitans)」と「延長するもの(res extensa)」という被造物としての存在と神の存在が、デカルトによって、生成変化を免れたウーシアとしての存在として均一化され、世界内存在を見逃している点が批判される(vgl., SZ, 92f.)。確かにハイデガーが言及している『現象学的研究への入門』でも、デカルトの延長の問題は取り上げられるが、それは前景に過ぎず、重点が置かれるのは、デカルトの真偽論や懐疑、そして「我在り」の内実である。では、なぜハイデガーは、『現象学的研究への入門』の内容を、1928年になって『存在と時間』に組み込んだと言ったのか。そして同時に、その組み込んだ内容が、延長や世界に関わるとすれば、そこにはどのような意図があるのか。

もともと、単純な思い違いである可能性は否定できない。しかし、ハイデガーに何らかの意図があったとするならば、同時期に行われたマールブルク大学での教鞭を締めくくる講義『ライブニッツ』における「メタ存在論」との繋がりが考えられる。というのも、この講義は、真理論からライブニッツ解釈に進み、そのモナド論の解釈へと移行していくが、ライブニッツの自我は、デカルトのコギトの自己確実性に帰着される一方で(vgl., GA26, 108f.)、そのモナド論は、デカルトの「物体的事物」との差異のもとに幾度か言及される(vgl., GA26, 91ff. / 105)。そしてその後、現存在の根本的な体制として「すでに-もとの-存在すること(das Schon-sein-bei)」(GA26, 159)が提示され、その中立性や「身体性」「空間性への現存在の分散」が論じられるのである(vgl., GA26, 173f.)。

以上から見れば、講義『ライブニッツ』は、確かに、ハイデガーのライブニッツ解釈や、ライブニッツによるデカルト批判へのハイデガーの視座を垣間見ることができ、その点でも有益である。しかし、以下のような視点も可能かと思われる。つまり、ハイデガーは、『存在と時間』へ向かう1920年代に、「思考するもの」の「我在り」の「在り」を形式的告示的な概念として、基礎的存在論である実存論的分析論の深化をはかった。しかし、『存在と時間』では——多数の指摘にある通り——身体や空間への言及が乏しくなってしまった。がしかし、『存在と時間』におけるデカルトの延長としての世界や実体解釈の部分は、ハイデガーとしては、講義『ライブニッツ』へ至る出発点のような意味をもっているのではないか、ということである。そしてその講義『ライブニッツ』では、現存在が世界へ投げ出され、身体的に自然の真只中に存在するものとして描かれるのだが(vgl., GA26, 212)、それは存在者全体を主題とする存在論への「転換」としての「メタ存在論」においてであり、それが基礎的存在論と一体化することで、形而上学の形成を意味するのである(GA26, 199ff.)。こうした点を、ハイデガーにおけるデカルト解釈という視座から見れば、講義『ライブニッツ』における「メタ存在論」は、1920年代に十分に考察できなかったデカルトの「物体的事物」を、「存在者の真只中における現存在の身体」という次元へと還元しつつも、基礎的存在論において解体されたデカルトの「我在り」の確実性ととも、現存在の「存在」へ回収していく試みであったとみなすことはできないだろうか。つまり、講義『ライブニッツ』における「メタ存在論」における身体への言及は、あくまでハイデガーとデカルトという視座から見れば、ハイデガーのデカルト解釈において残されていた身体という課題へと——不十分ながらも——取り組むものであったと考えられるのである。

<sup>1</sup> ハイデガーからの引用はVittorio Klostermann社のGesamtausgabeを使用し、略号GAと巻号、頁数とを記載した。『存在と時間』に関しては、Martin Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer, 18. Aufl., 2001を使用し、略号SZと頁数を表記した。なお本要旨は、昨年(2022)年度日本哲学会・春季大会一般研究発表に応募し、採用されたものである。しかし、筆者が所属する大学の校務の都合により、大会での発表を辞退しており、その他の学会でも未発表である。

<sup>2</sup> 詳細は、以下の拙論を参照のこと。「「確実性」を巡る対決——前期ハイデガーのデカルト批判——」、『哲學 67号』、日本哲学会編、216 - 230頁、2016年。